

さまざまなお会いの中で



東京 都

榎 かほ
沢 さわ
忍 しのぶ

今までいろんなお会いがありました。

さまざまなお会いの中から、私は強さを学びました。

幼小・学生時代

私は、脳性マヒという障害をもつてうまれてきました。うまれた時は、ごく普通の赤ちゃんでした。六か月健診で異常が発見され、その時から、毎日病院通いがはじまりました。当時は、今のように障害専門の病院はなく、整形外科でした。母の背中におんぶをされて、毎日マッサージに通っていたの

で有名だったみたいです。歩けなくても笑顔だけはあったので、病院に行き待合室で待つてる時も「どこが悪いんですか？」ときかれ、心理の検査でもケロケロよく笑っていたみたいです。やがて姉が幼稚園に行くようになり、私は行けなかったので油絵とピアノを習っていました。ピアノは、小さい頃から音感を育てておいた方がいいと言うことで習っていたそうです。油絵の作品は、いつも通っていた病院の診察室に飾ってもらいました。

その時の記憶はあまりありませんが、多分すごくうれしかったことだと思います。

マッサージの先生とは旅行に行ったおぼえがあります。とつてもやさしい先生たちでした。やがて学校に行くようになり、ずっと通っていた病院とも少しお別れになりました。学校は、養護学校で訓練もしっかりあったので、マッサージはやめました。油絵もピアノもやめました。私は、六歳まで親とはなれた事がなかったので第一歩の自立です。学校に行き、体育館で親とはなれてイスにすわる。すごく不安で涙を必死にこらえていたのを今でもおぼえています。でも、こらえていたのも、つかのま、次の日から、予定通り、泣いて先生を手こずらせていたみたいです。

当時は、はいはいで一日をすごしていたので、歩ける友だちにバッグをもってもらったおぼえがあります。でも、三年生で手すりにつかまり歩け、五年生で歩けるようになりました。少し、こわくもあつたけど、歩けるようになったのは、よろこびでした。

やがて六年になり、卒業です。養護学校は、卒業と言っても、中学校も同じ、仲間もほとんど同じ

です。でも私は、中学になって少し欲が出てきました。姉がとつてもうらやましくなり、普通の中学校に行きたくなり、先生にたのんだりもしました。でも結局、ダメでした。なので学生カバンで通学をゆるしてもらいました。念願がかなってうれしかったです。

やがて中学がすぎ高校生になりました。養護は、エスカレーター式なので受験なんてありませんでした。でも試験は、ありました。

この試験で落ちる人は、いるのだろうか？落ちたらどこに行くのだろうか？とみんなと話した事をおぼえています。でも落ちるなんてありません。そしてとうとう学生時代最後の高校生活がはじまりました。高校は、全員寮生活でした。それなりに楽しかったです。そこでは、小学一年から、高校三年まで平均的になるようにわけられていました。消灯時間などが早いのは、ちよつぱり不満だったけど、あまり家にいると学べない自分より下の子との接し方、我慢する心を学んだような気がします。ぶつかる事もしばしばあったけど、それもいい思い出です。

学校では、一年生の時の担任の先生がとても印象的でした。放課後、クラスのみんなと担任とお湯をわかしてコーヒーをのんだ事が忘れられませんでした。三年ともきさくな男の先生だったので楽しくすごす事ができました。三年生の時に学校で実習があり、看護師になりたかった私は、以前お世話になった病院にたのんでお手伝いをさせてもらいました。

はじめて実際の職場にはいり、いろいろ学ばせてもらい楽しく実習を終えることができました。な

おいつそう看護師になりたくありません。なので卒業後は、専門学校をえらびました。

と言ってもどの専門学校がいいのかわからずいると、父が教員で進路指導をしていた関係もあり、専門学校の先生たちがそろう会場に行く事ができました。目うつりしちゃうほどいろんな学校が集まっていました。でも私は、看護専門学校をまっさきに選び、相談してみる事にしました。そこで言われた言葉は、学校を卒業できて国家試験を通ったとしても、いざ病院にはいって患者たちにたよられると思いますか?という問いでした。

私にとってショックな一言でもあり、現実を見せられた一言でもありました。でもそこで止まっていたらいけないと気をとりなおして、今までとちがうタイプピスト専門学校の所に相談をしに行き、そこにめでたく決まりました。そこから私の挑戦がはじまりました。通学電車は満員、そして歩くスピードは早く、その波にのらなくてはいけないので、いつもドキドキでした。おされて転んだ事もあったけど、持ち前の明るさで切りぬけられたような気がします。でも、どうしても人の視線は足にきます。その視線がたえられなかった私に母は一言、「きれいな子だと思ってみんな見てるんだよって思えば」と言ってくれました。その言葉でなんだか心が軽くなったのを今でもおぼえています。今でもその言葉を思い出すと、あんまり視線も気にならなくなるのと同時に母に感謝しています。専門学校に行き、タイプも学んだけれど社会で生きて行くための強さも学んだような気がしました。

社会人時代

私は、なかなか就職がきまらずいろんな所に面接に行きました。ある会社では、試験をうけさせてもらいました。でも、スピードについていけず、相手の人にあやまられてしまいました。シヨックでした。寂しい気分になりました。試験ができないのは、私のせい。スピードがおそいのは、会社のせいではないのにあやまらないでほしかった。

父が、見るにみかねて、文具店をやってみないかと言う話をしてきました。

そこで、運命の出会いがまつたなんて、知るよしもない事でした。

文具店は、小学校の前で、父が私のためにひらいてくれました。子どもが苦手だった私は、とても不安でした。言語にも障害がある私に子どもたちは容赦なく質問をなげかけてきます。やはり子どもは、イヤだ！とにげだしたくなった時もありました。

お店では、宅配便の集配所もしていました。運命の出会いは、集配人さん。以前の集配人さんから、「今度から、すぐくまじめな人が集配にくるから」ときいてはいたけど、超がつくほどまじめでした。でも、一度、以前の集配さんから電話があり、「あの、お宅から出た集配の人どっちに行った？まだ帰ってこなくて」と聞かれ、笑ってしまいました。

彼は何度も私をデートにさそってくれました。しかし私は、今まで男の人、それも障害のない人とつきあった事がなかったので怖い面もあり、ずっとことわっていました。

でも、一度くらいは…と思う気持ちもあり、さそわれることにしました。彼は、レンタカーをかり、むかえにきてくれました。

車で走っていくうちレストランがみえて、「はいる？」ときかれ首を横にふった。カニはおいしく、食べたかったが、当時シャイな私は、カニを取れないのを恥ずかしく思ってしまった。結局ラーメンになりました。

それに二人で歩いていると階段がやたらと多い。困りもんだ。おりられないでモジモジしていると、彼は、「おりれないのなら早く言つてよ」と言われたが、やはり恥ずかしく思ってしまった。そんなデイトを何回かくり返したのち、とうとうプロポーズをされてしまいました。私が障害があるの知ってるはずなのになんで？つて、とつても疑問で不安でした。

でも彼は「そんな事どうでもいいじゃない。個性的でいいじゃん」と言う楽観的な見方をしていました。主人の実家にも言つたけれど、反対されるわけでもなく、家の両親にも反対はありませんでした。やがて彼もなまはんかな気持ちじゃない事がわかり、平成四年六月四日に新潟県長岡市にある式場で結婚式をあげました。私は、障害者は、障害者同士じゃないとわかりあえないんじゃないか？と変な考えをもっていたので、健常者と結婚はできないと思っていました。でも、この出会いは、私の考えをかえてくれる出会いとなりました。

今までいろんな人と出会つたけれど、今までにない考え方の人でした。私が少しでもひねくれて

「どうせ私は、出来ないわよ！」というのと、「また悲劇のヒロインを演じたいわけ？かわいいそうな忍ちゃんって思われたいんだ！」と言われ、その時は、とつても悔しかったです。

でも、あとで考えると、そんな事言ってくれる人は、今までいかなかったような気がしています。結婚生活もいろんな事があつたけど、それなりに楽しいものでした。やがて赤ちゃんができ、婦人科の先生によるといきむのが大変と言う事で、帝王切開にしました。その婦人科の先生は男の先生で、めつたに笑顔を見せない先生でした。私は、笑顔がほしくて、検診のたびにどうしたら笑顔を見せてくれるのかを考えていました。ある日、検診で笑顔を見せてくれました。私は、検診の結果をきくよりに、うれしい出来事でした。主人に言う「お前、何しに行ってるの？」と言われ、自分でもそう思い、笑ってしまいました。

私がんばらなくても、赤ちゃんが誕生した時は、すごくやさしい笑顔をしていました。帝王切開の時は、手術なので二週間入院です。はじめての子は、男の子。看護師さんたちから、「男の子は、力あるからいいわよ！よかったね」と言われピンとこなかったです。なぜなら私は、女の子がほしかったのです。病院では主人が赤ちゃんのおふろ入れがうまいと評判でした。私にだくと、赤ちゃんは泣くし、おむつ替えも、ぎこちなく、主人の方がなんでもスピーディ。うらやましくて主人にあつた事もありました。でも、よく考えると、主人は、日中いないので、私が全部やらなきゃいけないのになぜあつたつていたんだろうと思いました。

ある日、病院に通った時の事です。子どもを医者に見せると、医者は私にいろいろきいてきます。お医者さんにしたなら、親に言うしかないからあたり前の事だけど、でも私はすぐうれしかったのです。なぜなら、障害があると、とかく母が代弁者になりがちです。母がみんな話すので、相手も、私の事なのに母に話します。もちろん私も話すのは、おそいし、性格も積極的ではなかったので、母がどうせ話してくれるだろうという思いもあつたと思います。なので結婚をして、子どもがうまれてうれしくもあり、責任が出てきて少しこわいような感じがしました。やがて、三歳になり保育園に行くようになりました。

すぐ、保育園になじみました。おむかえに行くと、先生にかくれて帰りたくなさそうにしていた時間も何度かありました。少しだけ寂しかったけれど、行かないって言われるのも困ります。複雑な心境でした。保育園ではじめての運動会、感動でした。と同時にシヨックな事もありました。運動会の競技で、子どもをおんぶをして走り、ゴールに行きます。私は、おんぶができず、子どもの手をひき、歩いてゴールにむかいました。私は、とつてもみじめな気分になり、子どもに悪い事をしてるような悲しい気分になりました。でも本人は、ケロッとしていて、楽しんでいたみたいでした。夜、主人が帰ってきて、その話をしたところ、「子どもの運動会だろ。子どもが楽しいんだから、いいだろう」と言ってくれました。それはそうなのだろうけど少し寂しかった。

やがて二番目の子ができました。やはり、帝王切開でうみました。やはり男の子でした。ミルク

もいっぱい飲んでスクスクと育っていました。でも三か月健診で異変に気がつきました。光を目でおわなかつたのです。私は、信じられませんでした。「私の障害は、遺伝するはずはないのに……」と心の中で思いながら、いろいろ検査をうけに病院に行きました。リハビリも通い、親子で行く施設にも通いました。何か月間か通っているうちに、障害名がだんだんとわかってきました。脳性マヒ失調症という私と同じ障害でした。やはり、という思いが私の中にあつたような気がします。でも私は、障害がある分だけ楽観的な見方をしていました。主人も私を見ているので、特に大変なことと思わなかつたみたいです。二番目の子を育てていると、母の気持ちがわかるような気がします。上の子は、おしえなくてもできていた事が、下の子となると、全部おしえなくてはいけませんでした。例えば、食べる時スプーンを口にはこんで行く動作、イスにすわる動作、ハナをかむ動作、何もかも私は考えなくやつた動作が、こんなにもむずかしい事なんて思いませんでした。でもリハビリの先生たちにはアドバイスをうけ、ビデオにとりながら教えるとうまくいきました。八か月から親子で通う施設に行き、三歳になると今度は、障害がある子どもだけの施設に通いました。うちの子は、しゃべるのはおそいけど普通に話すので、普通の保育園でやってみないかという話があり、ずい分まよつたすえ、保育園にいれる事になりました。保育園では、障害がある子がいると、介助をしてくれる人がつきまです。とてもありがたかつたです。二年間の保育がおわり、卒園です。養護学校か普通校かまよいました。普通校にいれると親が付きそわなければいけません。でも子どもは、養護の一日体験をしたにも

かわらず、普通校に行きたいと言いました。私は、自分が養護学校に行ったのに、自分の生き方を否定しているんじゃないだろうかとも考えましたが、同時に私が養護を卒業して社会に出た時のギャップがつかつたので、子どもには小さい頃から、人にうちかつ強さみたいのを学んでほしいと思いました。ということもあり、普通校には、ボランティアをさがして行く事にしました。上の子も、同じ学校なのでいい分助けになります。小学校の先生たちもいい先生たちばかりです。せっかく普通校にはいったのだから、みんなに障害の事を知ってほしくて、ちょっとした新聞をパソコンでかいています。

私と子どもは、障害者の中では軽い方。普通の人たちの中に入るとスピードについて行けず中途半端な障害です。でもその中でさまざまな人に出会い、手をかりながら、がんばっています。消極的だった私が強くなれたのも、責任がある守らなきやいけない家族、子どもがいるからだと思っています。そこで一番私の自立にみちびいてくれた人、主人との出会いに感謝をしています。

樺沢 忍

昭和三十八年生まれ 主婦 東京都小平市在住

【受賞のことば】

私の文がえらばれるなんて思ってもいませんでした。きっかけはテレビを見ていた子どもの一言でした。「ママ出してみれば」でした。

その一言がきっかけでは、ありましたが「こういう人がいる。こういう家族もある」という事を知ってもらいたいと思う気持ちもありました。なのでえらばれた事は、とてもうれしかったです。

私の文をえらんでくださった方々に感謝しています。

選評

「さまざまな出会いの中から、私は強さを学びました」という冒頭の一節から、物事の本質を的確にとらえ、表現していく樺沢さんの文章力に驚きました。脳性まひという障害をもって生まれてからの幼少・学生時代、社会人時代そしてご主人との出会いと結婚・出産、四十二年の人生をいくつかの出来事で綴っています。その一つ一つの確かな確実さ、責任を自覚しながら「強く」なられていく過程が心にしみこんできます。

「一番私の自立にみちびいてくれた人、主人との出会いに感謝をしています」と締めくくっていますが、私もこの文章と樺沢さんたちの確かな人生に出会えたのは、ご主人のおかげと感謝しています。

(北村 真征)